

和楽器図鑑

弦楽器

I. 箏(こと)

著作権の関係上、省略

箏が民間にも広まったのは室町時代末期。明治時代になると、箏・三味線・尺八で合奏する「三曲合奏」も盛んになった。箏曲の作曲家・宮城道雄の『春の海』に代表されるように、西洋音楽の影響も受けながら古典的な演奏形態にとどまらない広がりがみられる。

管楽器

神楽笛(かぐらぶえ)

著作権の関係上、省略

宮中の儀式のときに演奏される横笛。日本古来の笛であるといわれ、神聖な場所で奏でられる楽器として尊重されてきた。

笙(しょう)

著作権の関係上、省略

宮中の儀式で使われる楽器。日本の楽器としては珍しく、5～6音の和音を出すことができる。

尺八(しゃくはち)

著作権の関係上、省略

竹筒に指孔をあけたシンプルな構造の縦笛。『源氏物語』にも「さくはちのふえ」として登場し、貴族に愛されていた様子がうかがえる。

打楽器

大拍子(だいびょうし)

著作権の関係上、省略

桶型の胴に枠付きの革を張った締太鼓で、神楽囃子や歌舞伎の下座音楽に使われる。細長い竹の撥で叩くと、高い大きな音が出る。

拍子木(ひょうしぎ)

著作権の関係上、省略

「火の用心」の夜回りや寺院の礼拝など、身近に使われてきた楽器。歌舞伎や相撲では、開始、区切り、終了などの合図を出す。

II. 三味線(しゃみせん)



三味線は、琉球(沖縄)から伝えられた三線を日本風に改良してできた楽器。琉球から伝えられた三線を最初に演奏したのは琵琶法師で、琵琶の撥を流用し、ニシキヘビの皮の代わりに猫や犬の皮を使い、音色も工夫された。

江戸時代には、地歌などの室内楽、歌舞伎や文楽などの劇場音楽、浪曲などの大衆芸能、民謡などの民俗芸能に欠かせない楽器として人気を広まった。

棹…インド産の紅木、東南アジアの紫檀や花梨などの硬い木材が使用される。紅木は数が減ったことで、輸入が難しくなっている。現在は、かつてインドから輸入して保管してある紅木を使って三味線を作っている。

撥…高級なものはべっこう(ウミガメの甲羅)や象牙(ゾウの牙)で作られる。

べっこうも象牙も、現在はワシントン条約で国際取引が原則禁止されている。

※ワシントン条約とは、絶滅の恐れのある野生動植物が無許可で輸入や輸出できないようにした国際的な取り決め。

細棹

中棹

太棹

棹の長さは「細棹」「中棹」「太棹」ともほぼ同じだが、棹の太さ、胴の厚さ、皮の厚さ、重さなどがちがう。駒の高さや重さ、糸の太さ、撥の大きさや厚さも三味線の種類によって使いわけられる。

著作権の関係上、省略

III. 三線(さんしん)

著作権の関係上、省略

中国の三弦がルーツといわれている。琉球王朝では、士族の男子のたしなみとして推奨され、伝統音楽の中心となった。最近では沖縄ポップスの人気とともに、伝統音楽にとどまらない存在として注目されている。

胴や棹に黒い漆を塗り、胴にはニシキヘビの皮を張る。水牛の角などでできた爪で3本の弦を弾いて演奏する。

和楽器新聞

発行日
2024年
2月4日

「人工皮」使い三味線らしい音質を実現

工房営む中野貴康さん開発
「動物の皮に頼っては未来ない」

持続可能な開発目標（SDGs）が注目される中、環境配慮や動物保護の意識は、伝統楽器の世界にも広がりがつつある。

◆雨の中でもOK、破れにくいこともメリット

ここ数年、津軽三味線の教室も営む中野さんが、犬や猫の皮が使われていることを説明すると、子どもたちから「かわいそう」と声が上がリ、入会をあきらめてしまうことが増えてきた。津軽三味線で使う犬の皮は現在、国内では生産しておらず、在庫などに頼るため、張り替える際は1枚5万円程度と高額になるのもネックとなっていた。

中野さんは「動物の皮に頼っていても未来はない」と危機感を抱き、人工皮の開発を決めた。30年前から三味線用の人工皮はあるが「キンキンとした安っぽい音になり、演奏者を納得させるものはなかった」。自ら繊維業者を回り、特殊な布を重ねて加工を施すことで、数年がかりで三味線らしい、丸みがありながら力強い音を実現。

犬の皮は湿気に弱く、1年ほどで破れてしまうが、人工皮は雨の中でも演奏でき、破れにくい。長く使うことができる。課題だった音色も、「プロも満足で

きる音の質になった」と自負。特に若い世代の奏者から問い合わせが多いという。三味線は象牙を使っていた糸巻きや、べっこうの撥が早くからプラスチックなどに置き換わってきたが、最後の壁が音に直結する胴の皮だった。「動物の皮を使うのが当たり前と考えていたが、時代に合わせて変わっていかないといけない」と中野さん。さまざまな奏者の音の好みに合わせるため、改良を続けていく。

◆動物由来の素材使用を取りやめる動き
欧米では消費者の嗜好に敏感なファッション業界を中心に、動物皮の使用を取りやめるケースが相次いでいる。

三味線以外の楽器にも代替素材の使用を模索する動きが出ている。琴の弦ははじく琴爪はもとも象牙が使われることが多かったが、乱獲や密猟への批判を受け、ファイバーグラスや竹由来の素材を使う例も増えている。



（東京新聞 2022年5月14日より作成）

伝統芸能、支える自負 三味線皮製造・橋本さん

トントン、トントン。釘を打つリズムが響く。葛城市の橋本末吉商店。猫の皮をなめし、三味線の「張り皮」にする工房だ。職人は全国で数人しかない。

「良い音色を出すには、打つ釘は72〜76本くらいと決まっている」。橋本一弘さん（77）が熟練の技を説明する。

猫皮は表面に凹凸があり、部位によって厚さもちがう。それが共鳴し合い、三味線特有の微妙に濁った音を生み出す。犬皮や人工皮のものもあるが、人間国宝の演奏会や歌舞伎では猫皮が好んで使われる。

三味線奏者が脚光を浴びる一方、作り手は、日陰の世界に埋もれてきた。90年代後半、関西で捕獲業者が動物愛護法違反で逮捕されるなどし、これを契機に業者はすべて廃業。ほかの職人の多くは後継者が育たず、引退した。

一弘さんは第一線を退き、長男の康広さん（47）が後を継いだ。いまは、国内産より品質が落ちる海外からの輸入皮に頼るしかない。「我々の技術

が日本の伝統芸能を支えているという誇りはあるのだが……」。一弘さんにはあきらめ感が漂う。



（朝日新聞 2012年4月13日より作成）

生きている遺産 古代からの音色

良質の三味線は、棹にインドの紅木、胴にタイなど東南アジアの花梨を使う。だが文化庁の03年度の調査によると、絶滅危惧種を保護するワシントン条約で輸入が規制されたり、原産国で伐採禁止になったり。使えそうな木材があっても、高値で買っ中国向けに輸出され、日本にいい材料が入らない。

胴に張る猫や犬の皮は中国やタイなどからの輸入に頼るが、各国で動物愛護の立場から反対の声が起きたり、食する習慣が廃れたりして、皮の入手が難しくなっている。

ただ、材料不足を嘆く声は意外なほど大きくない。「むしろ問題は邦楽人口の激減。今は需要がないから材料もいらぬ。だがこのままでは技術が消え、今あるものを直すこともできなくなる」。東京都江戸川区で琴や三味線を商う「向山楽器店」の向山正成さん（58）は嘆く。

「伝統」とは何であろうか。材料を巡る異変は過去にもあっただろう。むしろ変わらぬに受け継がれてきたのは「後世に守り伝えたい」という思い。伝統の音色を奏するのは、その思いではないだろうか。

（朝日新聞 2009年8月8日より作成）

コラム ～三味線の皮について、楽器の専門家によると～

- 猫皮** 三味線と言ったら、やはり猫の皮。猫のお腹の皮を使います。一匹で一丁分しかとれません。非常に高価ですが、一般には、舞台用に使われることが多く、その音は皮が薄いので「鈴」を転がしたような音です。
- 犬皮** 犬の背中皮を使うため、一匹で数丁分とれます。猫の皮に比べ音は硬く、少しでも皮が延びて弛むとボコボコした音になります。一般的には、稽古に使われることが多いようです。しかし、最近の舞台の音響設備の場合、犬皮の方が音が通り、良い場合があります。
- カンガルー皮** そもそも個体が大きいため、一匹でそれなりの皮が取れます。犬の皮に比べ滑らかで、音も響きやすい材質です。まだ普及していませんが、今後主流になることも考えられます。
- 人工皮** 破けやすく、とても日頃の管理が難しい従来の三味線の皮に対して、多くの方からのリクエストにより、破けない皮という名目で1980年代に登場。しかしながら、現実には熱に対して動物皮よりも弱く、その品質の改良は今後の大きな課題であり、音もそれなりという状況です。

（向山楽器店HPより作成）